

令和5年度 長崎市自然環境調査報告書:鳥類

長崎市自然環境調査委員 よしがい まさし 吉谷 将史

1 令和5年(2023年1月1日~12月31日) 長崎市自然環境調査報告:鳥類

令和5年1年間に長崎市にて記録された野鳥は226種(別添資料 長崎市鳥類チェックリストのとおり)。令和5年に新たに記録された野鳥はありませんでしたが、長崎大学大学院総合生産科学研究科 山口典之教授らの研究グループにより、長崎市の島嶼部においてカンムリウミスズメの繁殖が確認されました。

カンムリウミスズメについては、日本近海にのみ棲息するムクドリほどの大きさの海鳥で白黒のコントラストがハッキリしています。一生のうちのほとんどを海上で過ごし、陸に上がるのは繁殖期のわずかな期間のみです。日本で繁殖するウミスズメ科の鳥は7種類いますが、カンムリウミスズメを除く6種は本州北部や北海道近海の亜寒帯を主な生息域としており、対馬海流や黒潮



の通る温暖な海域で繁殖するのはカンムリウミスズメのみです。最大の繁殖地は宮崎県の枇榔島で推定 3000 羽とされ、ほかに伊豆諸島などが有名です。国指定の天然記念物に指定され、環境省のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類(絶滅の危機が増大している)にあたります。カンムリウミスズメの存在が明らかになったのはシーボルトが欧州に持ち帰った標本から 1835 年に新種として認められており、長崎とも関係の深い鳥と言えます。長崎市周辺の海域では以前から 10 羽程度の少数の群れが冬場に観察されており、繁殖の可能性が示唆されていましたが、今回の発見により調査保護の道筋が開けたことはうれしい限りです。また市民の方々にもカンムリウミスズメのことを知るよい機会になったと思います。

長崎市の野鳥の内訳としましては、留鳥50(1年を通して見られる)、夏鳥14(繁殖のため初夏に飛来し、秋には退去する)、冬鳥78(北方で繁殖し、晩秋に飛来、春先に退去する)、旅鳥149(春と秋の渡り期に数日間、羽休めのため滞在する)、迷鳥59(本来のルートとは異なるが、天候不順などのアクシデントにより舞い降りてくる)、計 350 種。昨年と種数の変更はありませんが、カンムリウミスズメを冬鳥から夏鳥に、アカハラを旅鳥から冬鳥に、キガシラセキレイ、アカマシコについては近年毎年のように確認されていることから迷鳥から旅鳥に変更しました(別添目録〇参照)。旅鳥と迷鳥で全体の6割を占め、周年見られる留鳥は15%あまり、夏鳥に至っては4%に過ぎず、残りの2割が冬鳥ということになります。

長崎市を代表する野鳥として、イソヒヨドリを紹介します。和名にヒヨドリが付きますがツグミの仲間に属する野鳥。英名は Blue Rock Thrush。国内では海岸沿いの岩場でよくみられるイメージですが欧州では標高の高い岩山に主に棲息しています。ツグミの仲間の多くが森林に依存した性質をもつ中で、国内のイソヒヨドリの多くは海岸沿いに生息しているのは島国である我が国に適した独自の進化を歩んできたのかもしれませんが。

長崎市では至る所で目にする野鳥で、市民の憩いの場になっている水辺の森公園から浦上川沿いの遊歩道でもよく見ることができます。山間部にも棲息し稲佐山でも繁殖しています。年間を通して見かける留鳥のため、年齢や季節による成長の変化を知ることができ、観察していて飽きない野鳥です。またツグミの仲間らしく美しいさえずりの持ち主でもあります。



👉 イソヒヨドリ幼鳥(7月下旬)

幼鳥の羽衣はメスの成鳥に似ますが、バフ色の斑点が頭頂にある点や背中中の羽の先端に白色部が多く混じることで区別できます。この個体は頭部のバフ色斑が目立たず、秋の換羽が既に始まっているようです。



👉 イソヒヨドリ、オス第1回冬羽(9月上旬)

幼鳥は7月から9月にかけて換羽し成鳥オスに似た羽衣に変化します。成長に比べ体上面、体下面ともに鱗上の模様に見える点で成鳥と区別できるほか、ツグミの仲間の幼羽によく見られる大雨覆先端の白色斑が確認できます。



👉 イソヒヨドリ、オス第1回夏羽(2月上旬)

右上の個体に比べ体下面の鱗模様はなくなりオレンジ色になっていることがわかります。



👉 イソヒヨドリ、成鳥夏羽(5月上旬)

2年目の秋(9月頃)の換羽で完全成鳥羽になるので、左下の個体から1年以上を経た状態。

長崎市内では春・秋の渡りのほか、夏鳥・冬鳥と国内で観察される主要なツグミ類を見ることができます。ツグミ類はおおむね 25 cm前後の大きさで、主に地面にて枯草をひっくり返して下に潜んでいるミミズなどを捕食します。多くは森林性の野鳥で目にする機会は少ないですが、4 月(春)や 10 月(秋)には住宅地周辺や都市部の公園の街路樹の下などでも見かける機会があります。公園のベンチなどでくつろいでいるとき、「ガサツガサツ」と枯れ葉をはわいているような音がしたら、近くにツグミがいるかもしれません。またホッピングといって、両足を揃えて飛び跳ねるように歩くのも特徴です。

クロツグミ(成鳥♂) 体長 22 cm 一部夏鳥

長崎市内で主にみられる時期は 4 月と 11 月ころの渡り期ですが、4~5 年前から山間部では囀りが聞こえ一部繁殖が確認されています。オスはお腹を除き全身黒褐色で黄色い嘴とアイリングが特徴。メスは背面がオリーブ褐色で脇に橙色味があり外観がことなります。英名は Japanese Thrush でまさに日本を代表するツグミ類と言えます。



ツグミ(第 1 回夏羽?) 体長 24 cm 冬鳥

長崎市内でみられる時期は 11 月頃渡来し翌春の 4 月ころまで見ることができる冬鳥。特に 4 月は他所で越冬した個体が一時たちよるケースがあり見かける機会が多くなります。雄雌ほぼ同色でこの個体は全体に色が淡く大雨覆先端に白色部が見てとれるので、昨年夏に生まれ、これから故郷(シベリア等)に帰る途中、長崎に立ち寄ったものと考えます。



シロハラ(成鳥♂) 体長 25 cm 冬鳥

ツグミ同様、長崎市内では 11 月から 4 月に見られる冬鳥です。数も多く、平和公園など街中の平地の公園から市民の森にいたるまで目にすることができます。冬にツグミ系の野鳥と出会ったら、まず思い浮かぶ野鳥です。オスの成鳥は頭部が暗褐色となりますが、メスや幼鳥では背中の色と同じオリーブ褐色です。



トラツグミ(性不明) 体長 30 cm 冬鳥

全国的に見られる大型のツグミ。夏は山間部に生息し見る機会も少ないが、冬は低地に移動するため住宅地周辺の公園でも目にする可能性がある。長崎市では主に冬鳥として扱っているが、全国的な区分としては漂鳥ということになる。長崎市内の渓谷沿いでは夏場に鳴き声を聞くこともある。



アカハラ(成鳥♂) 体長 24 cm 冬鳥

脇の橙色が名前の由来。本州中部以北の山林で繁殖し、冬は南下し九州では主に冬鳥です。長崎市でも稀に冬に観察できますが、他の越冬地に向かう途中に立ち寄る秋と繁殖地に向かう春に見られることが多く、特に春の渡りでは 10 羽ほどのまとまった群れを公園などでも見かけることがあります。



カラアカハラ(成鳥♂) 体長 23 cm 旅鳥

アカハラと似ていますが、背面が成鳥オスでは青灰色である点が主な違い。全国的に数少ない旅鳥とされているが、長崎市では 3 月～5 月にかけて毎年一定数の渡りが観察されています。名前の通り大陸由来の野鳥ですが、対馬では繁殖が確認されており、将来的には長崎市でも繁殖の可能性が考えられる野鳥です。



クロウタドリ(性不明) 体長 28 cm 旅鳥

ビートルズの楽曲にも取り上げられた美しい囀りの持ち主。本来の生息地主にユーラシア大陸。日本各地に記録がありますが、ほとんどが偶発的な飛来で、毎年のように記録があるのは南西諸島のみ。長崎市内では数は少なく、数例の確認にすぎませんが、ほぼ毎年記録のある稀な旅鳥です。



ハチジョウツグミ(性不明) 体長 24 cm 旅鳥
上に紹介したツグミの亜種とされていましたが来年改定予定の「日本鳥類目録第8版」では独立種として取り扱われる予定。ツグミの群れに混じるなどして、冬場に全国的に記録があります。ツグミに比べると圧倒的に数は少ないです。長崎市では主に春と秋の渡り期に観察され、時としてアカハラのように群れで観察できますが、やはり数は少ないです。



マミジロ(成鳥♂) 体長 23 cm 旅鳥
オスは全身黒色で眉の白さが目立ち、それが和名の由来になっている。北海道、本州中部以北では夏鳥として繁殖。九州・四国では旅鳥。長崎市では春の渡り期に時折目にするが、数は少なく単独での観察が多い。秋の渡りでも少数が通過する。メスはクロツグミ同様茶褐色で目立たないが、やはり眉斑は白い。



マミチャジナイ(第1回冬羽) 体長 22 cm 旅鳥
一見変わった和名だが、マミ(眉の白い)、チャ(茶色い)、シナイ(ツグミの古称)の意。日本では繁殖しない旅鳥。長崎市内でも毎年、春と秋に一定数が通過し、時として数十羽単位の群れで観察できることもある。この個体はイソヒヨドリ(イソヒヨドリ)の項目で述べた通り、大雨覆先端に明瞭な白色斑が確認できるので、生まれて初めて(1年目)の渡り途上で長崎を訪れた個体。シベリア等で繁殖し、台湾から東南アジアにかけて越冬する。



以上、令和5年度報告といたします。